

## 〈寺山修司〉を知りたい

斉藤 梢

寺山修司の短歌の「寺山修司が創ったであろう寺山修司」を、私はずっと見つけてきた。

「劇団」ではなく、「演劇実験室」としての「天井桟敷」を結成した寺山は、短歌という〈榎〉の中でも自由な実験をしたのかもしれない。そして、意識して、告白性を無くした。

ゆえに、「われ」≡寺山修司ではない。しかし、本当にそうなのかと、今あらためて作品を読んでみる。すると確かに「われ」≡寺山ではないが、寺山が創った「われ」というやりも、寺山が成りかわった「われ」ではないかと思えてくるのだ。

父の遺産のなかに数えむ夕焼はさむざむ  
 とどの畦よりも見ゆ 『空には本』  
 きみが歌うクロツカスの歌も新しき家具  
 の一つに数えむとする 『血と麦』

第一歌集『空には本』（昭和三十三年刊）には、第二回短歌研究新人賞の「チエホフ祭」の作品も並ぶ。「チエホフ祭」の次の「冬の斧」の一首目が、「父の遺産のなかに数えむ」の歌である。セレベス島で戦病死した父への想いが、作品の根底にありながら、

映像的な心理描写はいかにも寺山的だ。遺産のなかの夕焼とはどういうものか、作者はどこに居るのか、なぜ「さむざむと」なのか。読めば読むほどに解き明かせないものが漂う。一首で読むと、感傷的でセンチメンタルであるのに、歌集の中に置いてみると、何か不気味な冷たさを受け取る。この歌は『血と麦』

の「わが時、その始まり」の「チエホフ祭のピラのはられし林檎の木かすかに揺るる汽車過ぐるたび」の左隣りにも置かれている。『血と麦』（昭和三十七年刊）の「行為とその誇り」という文章では、「私はすべての芸術の根をつなぐ地盤は、行為のなかにしかない、と思っている」「一ばん大切なことは詩という概念など存在せず、詩とは在るものではなく、成るものだというのである」と説く。そしてこの歌集末の「私のノオト」では、「私個人が不在であることによって大きな「私」が感じられるということではなしに、私の体験があつて尚私を超えるもの、個人体験を超える一つの力が望ましいのだ」と言う。このような、寺山が文字表現で実行したかつ

たことを咀嚼して、残した作品を読むと、そこには確かに「行為」が示されており、先にあげた二首の「数えむ」が、錨のように思えてくる。

生活の中にある体験の差しだし方の独自性。「われ」に成りかわった寺山が「一つに数えむとする」恋人の歌う「クロツカスの歌」。「寺山修司抒情シリーズ1」『ひとりぼっちのあなたに』（昭和四十年刊）の「自己紹介」にある「映子をみつめる」を一部引く。

映子はいろいろのものを持っている。映子のもっているものを数えてみるのは多分たのしいことにちがいない。映子はまづ若さをもっている。

寺山が世を去って、三十六年。「私の墓は、私のことばであれば、充分。」とある。絶筆「墓場まで何マイル？」を寺山修司記念館の机の引き出しをあげて読む春。死を怖れ、この世に未練を残し、奔り続けた寺山は五月四日、四十七歳で果てはしたが、『われに五月を』（昭和三十二年刊）に記した「二十才僕は五月に誕生した」ということばによって、今も再生し続ける。

ねがふことみなきゆるてのひらの雪  
 高校一年の句の「てのひらの雪」に、寺山の〈素顔〉が一瞬、見えた。